2025 年の「冬至」は 12 月 22 日(月)で、一年の中で最も昼の時間が短い日です。
また、12 月 22 日から次の小寒の 2026 年 1 月 5 日までの 15 日間ぐらいを指します。

冬至とは生命の象徴である太陽の力が最も弱くなる日であることから、
「死に最も近い日」と考えられ、恐れられてきました。
一方で、この日を境に日照時間が延びていくことから、陰の気が極まって
陽の気に向かう折り返し地点とも位置づけられていました。
冬至は別名「一陽来復（いちようらいふく)」という言葉で表現されますが、
良くないことが続いたあとに好転すること。
冬至の日を境に運が上向いていくことを表しています。
冬至とは、夜の時間が最も長くなる日でありながら、季節をもたらす太陽への深い信仰を感じさせる
重要な日として位置づけられていたようです。

年の初めに、新たな 1 年の幸せを願ってお参りするのが初詣です。
一方、年末に、1 年間無事に過ごせたお礼を伝えるお参りは「年末詣（ねんまつもうで)」と
呼ばれています。冬至から大みそかの間にお参りするのが「年末詣」とされています。
古い暦では、冬至を新しい年の始めとしていた考え方もあり、冬至に行事を行う神社などもあります。
冬至には神社に出向いて、この 1 年を振り返るのも良い過ごし方です。

冬至から年末にかけての「年末詣」は、煤払い（12/13 以降）が終わり境内が清められ、
冬至で神仏の力が強まる時期に行う、感謝と新年の祈願を兼ねたお参りで、清められた場所で新年の
準備を始める良いタイミングで縁起がよいとされます。
大掃除が一段落した年末（29 日～31 日頃）に参拝し、初詣とは別に、お礼参りや新年の願い事も
できるのが特徴で、「除夜詣（じょやもうで)」とも呼ばれます。

元々は、大晦日の夜から元旦にかけて神社に籠る「年籠り（としごもり)」という風習が由来で、
これが「年末詣」と「初詣」に分かれました。
混雑を避けてゆっくりお参りでき、「心の大掃除」のような意味合いもあり、神様のパワーが高まる
時期とされるため縁起が良いとされています。

日本(ひのもと)の冬至も梅の咲きにけり　　小林一茶

冬至という寒い時期にもかかわらず、日本で梅がもう咲き始めている、
という情景を詠んだ句で、季節の移ろいや生命の息吹を感じさせる作品です。
この句は、一茶の自然への愛着や、弱いものに寄り添う視点が感じられます。
一年のうちで昼が最も短い日。本来は真冬のど真ん中ですが、その頃に梅が咲いている、
という驚きと喜びが込められています。
厳しい冬の寒さの中で、一足早く春を告げる梅の姿に、一茶が生命の力強さや季節の不思議さを
感じ取った、心温まる一句と言えます。